

| | | | |
|---------|-----------------------------------------------------------|---------|--------|
| 氏名 | LIAO XITONG | | |
| 学位の種類 | 博士（芸術学） | | |
| 学位記番号 | 博甲第 10342 号 | | |
| 学位授与年月 | 令和 4 年 3 月 25 日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 | | |
| 審査研究科 | 人間総合科学研究科 | | |
| 学位論文題目 | 美術のワークショップ実践者の学びに対する支援の研究 —実践知と A/r/tography の観点に基づいて— | | |
| 主査 | 筑波大学教授 | 博士（芸術学） | 直江 俊雄 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士（芸術学） | 石崎 和宏 |
| 副査 | 筑波大学助教 | 博士（芸術学） | 吉田 奈穂子 |
| 副査 | 東京学芸大学准教授 | 博士（感性学） | 笠原 広一 |

論文の内容の要旨

LIAO XITONG 氏の博士学位論文は、美術のワークショップ実践者を育成するために、実践者の学びに対する支援のあり方を熟達者の実践知の分析から検討し、その知見をもとに新たな支援方略を開発し、その支援方略の有効性と課題を考察したものである。その要旨は以下のとおりである。

本論文は、序章・終章を含めて全 11 章からなる。序章では、著者は研究の背景、目的、方法などについて述べている。近年の美術のワークショップの広がりと同様化が進むなかで、その実践者の育成が課題となっている背景をふまえ、研究目的は、美術のワークショップ実践者の学びに対する支援のあり方を明らかにし、具体的な支援方略の開発とその支援方略の検証であるとしている。また、質的研究方法をベースとして熟達者への意識調査を分析し、新たな支援方略を実践し実証的に考察するとしている。

第 1 章では、著者は方法論・活動形態としてのワークショップが発展してきた背景や日本への移入と実践の展開について整理している。また、美術のワークショップの実践状況を美術館教育や造形教育団体・学校教育、児童施設、アートプロジェクトなどの観点から論述し、本研究の対象となる美術のワークショップの位置づけを明確化している。

第 2 章では、日本における美術のワークショップに関する先行研究 337 件を抽出して分析し、その多くが実践事例報告であり、人材育成や実践者に関する研究、特に実証的データに基づく質的研究が不足していることを指摘している。

第 3 章では、著者は美術のワークショップ実践者の学びに対する支援方略のあり方を検討する手がかりとして、長年の実践経験を有する熟達者に対してワークショップ実践に関する意識調査を行い、熟達者がもつ実践に対する意識・知見や熟達過程に影響する要因を考察している。その結果、実践知の内容に関わる「技術・スキルの側面」と「態度・意識の側面」、ならびに実践者の熟達に影響する要因を明らかにしている。

第 4 章では、美術のワークショップ実践者の学びに対する支援のあり方を検討し、実践における省察と探求を学びの二つの側面として位置づけている。その学びの支援を具体化するために、学習や実践を

可視化する方法としてのパフォーマンス評価と、芸術特性を省察的な探究に用いる方法論としての A/r/tography に着目し、それらを取り入れた支援方略の構想を論じている。

第5章では、著者は実践知の観点から、実践者の省察と学びを可視化する支援ツール「自己評価ルーブリック」を開発し、予備的实践調査からその活用効果と課題を考察している。

第6章では、Arts-based Research と A/r/tography の特徴、それらのワークショップとの親和性について論じている。さらに、予備的实践調査の分析から、A/r/tography をワークショップ実践での省察活動に取り入れることが実践者の省察と探求を効果的に促すという仮説を導き出している。

第7章では、著者は自己評価ルーブリックと A/r/tography という二つの支援方略を統合した支援プログラムを開発し、その活動目標や活動内容、実施方法などの詳細について説明している。

第8章では、支援プログラムの実践をふまえ、参加者の活動過程での意識についてカテゴリー分析をしている。その結果、活動を通して参加者の「意識の共有と拡張」が見られ、ワークショップの実施や省察、探求、共有を通して「題材の可能性の拡がり」と「探求形式の拡がり」が促されたことを指摘している。さらに「自己内省が主な探求」と「題材実践が主な探求」という二つのタイプが認められたことを明らかにしている。

第9章では、著者は第8章での実践結果について自己評価ルーブリックと A/r/tography との関連から省察と探求に対する支援の効果を検証している。特に実践知の技術・スキルの側面と態度・意識の側面からの考察では、実践知に関する参加者の意識と支援プログラムの活動との関係を明らかにし、ワークショップの実施意義についての理解が促されていることを指摘している。

終章では、各章における成果をまとめた上で、美術のワークショップ実践における省察と探求の支援方略としての自己評価ルーブリックと、A/r/tography の関係を総括している。特に二つの支援ツールを統合することによって、支援プログラムでの学びが実践知のどの部分に位置するのかを明確化する自己評価ルーブリックと、省察と探求を促す A/r/tography が補完し合う構造として機能することの意義を論じている。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、美術のワークショップにおける実践知の調査と検討から、技術・スキルの側面と意識・態度の側面から実践知を構造化し、省察を可視化するためのルーブリックと、省察しながら探求を促すための A/r/tography を取り入れた支援方略を具体化してその効果と課題を検証したものであり、その成果は高く評価できる。また、その支援方略は、今後の美術のワークショップ実践者の育成において、実践についての省察と探求を促す先駆的方法としての意義をもつものである。一方、対象とするデータが限られた点など、より広範な検証が今後望まれるという課題は残されている。本論文で提示された学術的知見を引き続き学校教育や社会教育の場において実証的に幅広く発展させ、美術のワークショップ実践者の育成に貢献していくことが期待される。

令和4年1月11日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。